

津軽とエチオピア

飢餓の経験

日時
2008年4月19日(土)

場所
弘前大学

シンポジウム趣旨 ◆曾我 亨

エチオピア＝飢餓。欧米の歌手によるチャリティー活動のインパクトもあって、私たちはこのイメージを強く印象づけられました。しかし、今やこのイメージは間違っています。

エチオピアは穀物の輸入を進めたり、干ばつが起きている地域に食糧をとどけたり、干ばつが起きやすい地域の農民をより安全な地域に移住させたり、収入を安定させる開発をすすめたりすることで飢餓のリスクを克服しつつあるのです。

けれども、こうした開発や政策をすすめているのは国際機関や国家などの、いわば「外部」の機関です。では、飢餓や飢饉に直面している当事者たちは、援助を待っているだけで何もしてこなかったのでしょうか。そんなことはありません。現地の人たちも飢餓や飢饉に対抗しようと、いろいろな活動を一所懸命やってきました。このシンポジウムでは地方(ローカル)に焦点をあて、当事者たちのいわば「内部」の視点から飢餓を克服する方策について考えます。

とくに参考にしたいのは津軽の飢饉の経験です。江戸時代、津軽の人々は飢饉とたたかうため、山林を活用するユニークな戦術を産み出しました。このようにローカルに焦点を当てることで、私たちは困難に立ちむかういろいろな方法を生み出すことができます。それはまた、現代の津軽がかかえる困難を克服するための第一歩でもあると思うのです。

(そが・とおる／弘前大学)



作：中村友美